

魯迅「阿金」覚え書

—魯迅の民衆像・知識人像覚え書 (4)

中 井 政 喜

I. はじめに

雑文「阿金」(1934・12・21、『且介亭雑文』、『魯迅全集』第6巻、1981)は次のような内容である*¹。

1934年頃、租界都市上海に住む語り手の家の斜め前に、外国人の家がある*²。そこに阿金という名の女中さんがいた。語り手の家の斜め前がその家の裏口にあたる。この女中さんの行動が語り手の仕事を妨害し、その引きおこす事件が語り手を困惑させる。ひいては語り手は従来、女性を中国旧社会の弱者・犠牲者として考えてきたが、しかし阿金の一連の行動は、語り手のこの考え方を揺り動かし覆した。

この小論の目的は、次の点を追究することにある*³。①「阿金」を書いた語り手(魯迅)の意図はどこにあったのか。②「阿金」は魯迅に何をもたらしたのか。

II. 阿金の生活する社会と時代

一 阿金の仕事ぶり

「阿金」(1934・12・21、前掲)の主人公阿金は、租界都市上海で働く下層の女性労働者である。おそらく封建的農村から出てきたと推測する。彼女は1934年頃、外国人の主人に雇われていた女中さん(「上海では娘嬢と呼び、外国人は阿媽と呼ぶ」(「阿金」、198頁))である。

阿金は、経済的面から言うと、貧窮の農村から繁栄する都会へでてきた年若い女性労働者である。彼女は、倫理的な面から言うと、封建的礼教的旧社会から規範の稀薄な租界都市の社会に移ってきた。彼女は、伝統的共同体としての規範がほとんど崩壊した、上海の下層階層の社会に属して働いている。

彼女は女友達が多く、一日の時間が遅くなると、多くの女友達が彼女のもとに集まり、大声の井戸端会議が始まる。彼女はかつて皆にむかって言った、「情夫を作らないのなら、

上海へ来て何をするのよ……」(「阿金」、198頁)。

この傍若無人の井戸端会議のあまりのうるささに、外国人が飛びだしてきて、彼女らを足で蹴飛ばし、蹴散らすことがあった。

阿金は、規範が稀薄な上海の下層社会で、女中としての仕事以外には、感覚的自由と享樂的自由を追求する。

彼女はおそらく、人間的自立ができていない農村の女性の境遇に育ち、教育を受ける機会がなく、目覚めへの契機を欠いた下層階層の女性労働者の境遇にあった。(それは彼女の個人的責任とは言えず、社会的歴史的な状況が彼女をそのような境遇に置いたと言わなければならない。) 彼女は、「洋語〔外国語—中井注〕」(「阿金」、200頁)をしゃべり、インド人の巡査に対して自分と近所の老女とのけんかについて、直接訴えることができた*4。その後、けんか相手の老女による阿金に対する報復がある。

「翌日の早朝、阿金の家から遠くない、外国人の家の西崽〔外国人の家で使用人として働く中国人男性——中井注〕が突然阿金の家に向かって逃げてきた。あとには剽悍な大男が三人追いかけている。西崽のシャツはすでに破れていた。おそらく彼は誘いだされて、また後ろの門もふさがれ、戻ることができずに、それでやむなく愛人のところへ逃げてきたのだろう。愛する人のかたわらは、もともと安心立命できる場所である。イブセン(H.Ibsen)の演劇中のペール・ギュントは、失敗のあと、結局愛する人のスカートのもとに隠れ、子守歌を聴く大人物である。しかし私は、阿金はノルウェーの女性と比べられないだろうと思う、彼女は無情で、胆力もなかった。ただ感覚が鋭敏で、その男が駆けつけようとするときには、彼女はすでに急いで後ろ門を閉めてしまった。そのためその男は袋小路に陥り、やむなく立ち止まるしかなかった。」(「阿金」、200頁)

暴漢から逃げて避難を求めてきた情夫に対して、彼女はいち早く戸を閉め、拒絶して、その情夫が殺られるのにまかせる。「無情で、胆力もない」(「阿金」、200頁) 彼女は、虚無的享樂的利己主義者の態度を示すと言える。

また、その働きぶりは次のところに窺われる。

「彼女はおそらく〔物干し台から〕階段を下りるのを好まないのだろう、竹竿、木の板、さらにはほかの何かが、物干し台からまっすぐに落ちてきて、私が道をとるときには、十分注意しなければならなくさせた。まずこの阿金が物干し台の上にいるかどうかを見て、もしいれば、遠回りをしなければならぬ。」(「阿金」、198頁)

阿金が物干し台で仕事をしているときには、その下の道は落下物による身の危険があった。

二 1934年頃の上海における阿金の出現

1934年頃の上海における語り手（魯迅）の身のまわりでは、どのようなことが起きていたのだろうか。

1933年1月、中国民権保障同盟上海分会が結成され、魯迅もそれに加わった。しかし同年6月18日、民権保障同盟の総幹事楊杏仏が上海フランス租界で国民党特務に暗殺され、魯迅は6月20日その葬儀に死を覚悟して参加した。また、1934年2月、国民党中央部は新しい文芸と社会科学の書籍、149種類を発禁とし（そのうち魯迅の著訳書は十数種にのぼった）、5月、図書雑誌審査委員会を上海に設立した。1934年11月、『申報』主編、申報館総支配人、民権保障同盟会員の史量才が国民党特務に暗殺された。^{*5}

1934年頃の租界都市上海は、外国人が租界地区を支配する町であった^{*6}。たとえ中国人が、外国人の雇用する使用人（中国人）の過失によって死ぬとしても、それを問題にすることは難しかった。

「[ものが落ちてくるのを避けるのは——中井注] もちろん、これは大半、私の度胸が小さく、自分の命を高く見積もっているためであろう。しかし私たちは彼女の主人が外国人であることも考えなければならない。ぶち当たられて、頭にけがをし、血を流すのは、もとより問題にならない。たとえ死んだとしても、同郷会を開き、電報を打っても役に立たない。——まして私は思う、私も必ずしも同郷会を開くことができるほどのものではない。」（「阿金」、傍線は当局の検閲によって赤線を引かれた部分、198頁）

また、租界都市上海で、外国人の雇用する使用人中国人男性に西崽がいる。

「西崽の厭わしいところはその職業にあるのではなく、彼の『西崽相』にある。こここのいわゆる『相』とは、相貌を言うのではなく、『中に誠なれば、外に現る』もので、『形式』と『内容』を含めて言う。この『相』とは次のようなものである。外国人の勢力が多くの人より強くと考える。自分は外国語が分かり、外国人に近い、だからまた多くの中国人よりも上だと考える。しかし自分は、また黄帝の出自であり、古い文明を有し、中国の事情に精通していて、洋鬼子よりも優れている、だから多くの中国人より勢力が強い外国人に比べても優れている、このために外国人の下にいる多くの中国人よりもいっそう優れている、とする。」（『題未定草』(二)、1935・6・10、『且介亭雜文二集』）

外国人の支配下における租界都市上海に、その使用人西崽が出現した^{*7}。それと近似する「相」をもつものとして、外国人に使用される女中さん阿金が出現していると私は考える^{*8}。阿金の存在は魯迅にとって新しい認識の対象であったと思われる。

Ⅲ. 阿金の諸相

一 「阿Q正伝」との比較

「阿Q正伝」(1921・12、『晨报副刊』、1921・12・4-1922・2・12、『呐喊』)は中国人の国民性の伝統的悪(精神勝利法等)に対する批判と*⁹、辛亥革命の実態(中国旧社会の変革しがたい実態)の認識を物語の二つの主柱とした。

それに対して、「阿金」(1934・12・21、前掲)は中国人の国民性の悪それ自体に対する批判(第一動因としての国民性に対する批判)であるというより、むしろ阿金をめぐる時代と社会に対する痛烈な批判に主眼がある、と私は考える。

なぜなら、第一に1928年頃以降、魯迅は中国人の国民性について第一動因として考えることはなかったと思われる。魯迅は1928年頃以降において、ブレハーンフの史的唯物論の考え方を受容し、国民性が歴史的社会的諸条件の下に形づくられた所産であり、或る時期或る社会に国民性自体は存在するとしても、しかしその国民性は第一動因ではない、と理解していた*¹⁰。ゆえに1928年頃以降、たとえ魯迅が国民性に対する批判を行ったとしても、国民性をその歴史的社会的諸条件の所産であるとする前提のもとに、結果として現存する国民性の問題をとりあげていると思われる*¹¹。第二に、「阿金」は、1934年頃の租界都市上海の一部の、外国人に雇われた下層の民衆・女性労働者の姿を描きだし、阿金をめぐる一連の事件を描いている。すなわち阿金は1934年頃、租界都市上海に出現していた一つの典型を示すものと思われる*¹²。阿金と同類のものは、男性の場合、西崽であり、女性の場合〈阿金〉として現れる。それは外国人が支配する租界都市上海のような都市に現れる女性の一つの典型であり、全中国に普遍的に存在する国民性として位置づけられて描かれたものではない*¹³。ゆえに、第三に、1921年頃の「阿Q正伝」の場合、魯迅は意図的に阿Qの描写をとおして国民性の伝統的悪を描きだそうとしたのに対して、「阿金」の場合、魯迅は1930年代の租界都市上海における、外国人に雇われる下層社会の女性労働者阿金という形象を忠実に描きだした。その結果として、国民性批判につづる部分が生じていると考える。

「阿金」における語り手の矛先は、阿金に直接向いた部分があると同時に、主として阿金を生みだし、阿金を漂流させる、この時代の租界都市上海の支配構造・社会構造に向けられている。ひいてはこのような状況を許容する、中国の支配政権・国民党政権に暗に向けられている、と私は解釈する。

言い換えれば、この「阿金」の意図は、第一に、阿金のような存在を生みだす1934年

頃の租界都市上海、上海社会の現状に対する魯迅の告発である。第二に、この告発は、このような下層社会の上に立つ租界都市の社会構造、租界の外国人支配層、ひいては外国人に対して無力な国民党政権に対する批判に連結していく。(そのためにこそ国民党政権の検閲機関は、敏感に掲載を拒否したと言える。) 第三に、「阿金」には、1934年頃の租界都市上海の下層社会において無情で胆力もなく、虚無的享樂的利己主義的に生活する阿金、すなわち租界都市上海で外国人に雇われる、下層社会の女性労働者の一つの典型に対する、すなわちこのような一部の民衆・女性に対する魯迅の新しい認識と批判が見られる。この批判を否定することはできないと思われる。

しかし阿金は、批判すべき中国人の伝統的国民性の典型(1921年頃の阿Qのように)として取りあげられたのではなく、1934年頃、租界都市上海が生みだした、外国人に雇われる下層労働者の一つの典型(女性の場合は阿金像、男性の場合は西崽像)として俎上にあげられた、と私は理解する。

『阿金』は《漫画生活》に書いたものである。しかし掲載が許可されないばかりでなく、聞くとよれば、南京中央宣伝会にまで送られたという。これはまことに一篇の漫談にすぎず、いささかの深意もない。どうしてこのような大問題を引きおこしたのか、自分ではどうしても理解できない。のちに原稿を取りもどして、まず第一頁に二つの紫色の印があるのを見た。一つは大きく一つは小さい。その文字には、『削除』とあり、おそらく小さいのは上海の印であり、大きいのは首都の印であろう。そうであれば『削除』しなければならないのは、すでに疑いがない。さらに見ていくと、多くの赤い傍線を見つけた。いま黒の傍線に改め、本文のわきにとどめる。

傍線を見ると、いくつかの箇所はその理由を悟ることができる。たとえば、『主人は外国人である』、『爆弾』、『市街戦』のたぐいは、もちろん言及しない方が正しい。しかしなぜ、私が死んだとしても、『必ずしも同郷会を開くことができるほどのものではない』と言ってはならない理由が、わからない。当局の考えでは、私が死んだら同郷会を開くはずだと思っているのだろうか。

私たちはこのような場所に生き、私たちはこのような時代に生きている。」「(『且介亭雜文』付記、1935・12・30、『且介亭雜文』)

「阿金」の意図は、このような場所(租界都市上海という場所)とこのような時代(帝國主義列強の支配する租界が中国に存在し、そして中国において国民党政権による弾圧が

行われる1930年代の時代) に対する抗議にほかならない、と思われる。

二 「采薇」における「阿金姐」

小説「采薇」(1935・12、『故事新編』、文化生活出版社、1936・1、『魯迅全集』第2巻、1981)にも「阿金姐」とよばれる召使いが登場する。周時代の小丙君の召使い阿金姉さんは、租界都市上海の女中阿金の延長線上にあり、より知的な姿をもつ。彼女は伯夷・叔斉に対する小丙君の評言を聞き、その評言は自分の考えではないにしろ、理想主義者(伯夷と叔斉)にその言葉を告げ、それは二人を昏倒させた。

また他方、「阿金」(1934・12・21、前掲)においては、阿金が自らの行動によって、語り手(魯迅)の理想主義(人道的理想主義)を、すなわち女性を中国旧社会の弱者・犠牲者としてのみ見る偏向を、事実によって揺るがした。

「阿金の容貌はさわめて平凡である。いわゆる平凡とは、普通の顔立ちで、覚えることが難しいことである。まだ一月にならないのに、彼女がどういう様子だったのかを、口に出すことができない。しかし私はまだ阿金を嫌っている、〈阿金〉という二文字を思っただけで嫌だ。近隣で騒ぎを起こして、これほど深い恨みを作るはずがない。私が彼女を嫌うのは、数日を要せずして、彼女が私の三十年来の信念と主張を揺るがしたからである。

私はこれまで昭君が出塞して漢を安んずることができた、木蘭が従軍して隋を維持することができたとは信じなかった。また、妲己が殷を滅ぼし、西施が呉を沼沢にし、楊妃が唐を乱したという古老たちの話も信じなかった。私は、男権社会の中で女性は決してこのような大きな力をもつはずがない、興亡の責任はすべて男性が負うべきものであると思っていた。しかしこれまでの男性の作者は、たいてい滅亡の大罪を女性の身に押しつけた。これはまことに一文の価値もない、見こみのない男性である。あにはからんや、いま阿金は平凡な容姿、凡庸な才能の女中さんの身で、一月もかからずに、私の目の前で四分の一里をかき乱した。もしも彼女が女王であったり、或いは皇后、皇太后であるならば、その影響も推察できる、大きな混乱を引きおこすに足るだろう。」(「阿金」、201頁)

言い換えれば、「阿金」には、中国旧社会や租界都市における女性の現実の役割を十分に把握することなく、自分の理想・思想を信じてきた語り手の理想主義、観念論的理想主義に対する自己批判と内省もこめられている。阿金は行動によって語り手の観念論的理想主義を打ちくだいた。

「采薇」においては、社会の現実を十分に把握することなく、自分たちの理想を固守し、

また実行において微力であった理想主義者、観念論的理想主義者（伯夷と叔斉）に対する諷刺（それは嘲弄ではなく、結果として感得する諷刺であり、ゆえにそこには同情も読みとれる）の意味がある。

この点から言えば、「阿金」には観念論的理想主義に対する語り手の内省の意味がこめられており、「采薇」には観念論的理想主義に対する諷刺と同情の意味がある。召使い阿金姉さんは言葉によって、伯夷・叔斉の観念論的理想主義を打ちくだいた。この共通する一つの主題に注目して、一歩進めて言えば、「采薇」には「阿金」を小説化した一面を窺うことができる。すなわち理想主義を打ちくだかれた「阿金」の語り手は、すなわちこの観念論的理想主義者は、「采薇」の伯夷・叔斉に姿をとって登場し、諷刺と同情の対象となる。

しかし「采薇」ではこれに止まらず、召使い阿金姉さんはさらにデマゴグの役割を果たす。

「のちにまた或る人は、〔伯夷・叔斉が——中井注〕 実はおそらく故意に餓死したのだらうと言った。なぜなら彼は、小丙君の屋敷の召使い阿金姉さんから次のように聞いたからである。その十数日前に、彼女〔召使い阿金姉さんを指す——中井注〕は山へ行き彼らを数言からかった。馬鹿者はきつとかんしゃくもちで、おそらく怒って食を絶ち、だだをこねたのだらう。しかしだだをこねるのは結局自分の死をもたらしただけよ。

そこで多くの人は非常に阿金姉さんに敬服し、彼女が聡明だと言った。しかしまた或る人たちは彼女が醜薄すぎると言った。

阿金姉さんの方は伯夷・叔斉の死が、彼女と関係があるとはべつに思わなかった。もちろん、彼女が山に行き数言からかったのは、事実である。しかしこれは単にからかいにすぎない。あの二人の馬鹿者がかんしゃくを起こし、そのために薇を食べなくなったのも、事実である。しかし彼らは決して死ななかったし、むしろ幸運を引きよせた。

『お天道様の心は大変すばらしいものよ』と、彼女は言った。『彼らがだだをこねて、餓死しそうになったのを見て、母鹿にその乳で彼らを養うように命じなされた。そら、これはたいへんな幸運ではないだろうか。土地を耕す必要もなく、柴を刈る必要もない。ただ坐っていさえすれば、毎日母鹿の乳が口に届けられる。しかし卑しい奴は好意が分からないのよ。あの老三〔叔斉を指す——中井注〕は、彼は何という名前だったのかしら、つけあがって、鹿の乳ではまだ足らなくなったのさ。彼は鹿の乳を飲みながら、心の中で考えた。（この鹿はずいぶん太っている、これを殺して食べたら、味がきつと悪くないだらう。）そう思いながらゆっくりと腕を伸ばして、石を握ろうとした。鹿に神通力があるかどうか

知らないが、人の心がすでに分かって、すぐすると逃げだしてしまった。お天道様は彼らの食い意地を嫌って、母鹿にそれから行かせないようにした。ほら、彼らはやっぱり餓死せざるをえなかったのよ。それは私の話のためではなく、むしろ自分の貪欲、食い意地のためなのよ。……』」（『采薇』、401頁）

召使い阿金姉さんは伯夷・叔斉をからかったことを事実として認め、またそれ以後彼らが薇を食べなくなったことを事実として認める。しかしそのうえで召使い阿金姉さんは、彼らが自らの貪欲によって餓死を招いたとする母鹿に関する物語を語り、伯夷・叔斉が餓死することについて自業自得説を展開した。

『采薇』の語り手から見れば、たとえ伯夷・叔斉の生き方が観念論的理想主義であって、諷刺と同情の対象であるにしろ、彼らは少なくともその理想を微力ながら実行し、その理想に殉じようとした^{*14}。『采薇』において語り手は最後の場面で、召使い阿金姉さんを登場させる。召使い阿金姉さんは流言によって、その彼らの生き方を人間の卑俗な貪欲のレベルにまで引きおとして物語り^{*15}、その餓死を彼らの自業自得であるとする^{*16}。その説明によって、理想に殉じた伯夷・叔斉の死に対する人々の、ほのかに存在した良心の呵責をやわらげる作用を果たした。

「この物語を聞いた人々はみな、最後に深いため息をつき、どうしてか分からないが、自分の肩さえもずいぶん軽くなったように考えた。たとえ時には伯夷・叔斉のことを思いだすとしても、しかしそれはほんやりとしていて、彼らが石の壁のところうずくまり、まさに白いひげの大きな口を開けて、懸命に鹿の肉を食っているのを見るかのようだった。」（『采薇』、412頁）

召使い阿金姉さんは『采薇』において、いっそう悪辣で鮮烈な女性の知的な姿をもって出現している。この召使い阿金姉さんは、文人小丙君の偽善に照応するものであり^{*17}、古代の悪辣で鮮烈な知的な女性として出現していると言える^{*18}。

伯夷・叔斉のような、観念論的理想主義に殉ずる生き方を、現実を一步でも具体的に動かすことに微力な生き方（武王に対する諫言と、周の粟を食わないという抵抗の仕方）を、この主義と信念に徹した高潔な生き方を、語り手は同情をこめながら、基本的に諷刺している、と私は考える^{*19}。しかしながら語り手は他方、小説の最後の部分において召使い阿金姉さんの流言とそれに安んずる人々を描きだした。そのことによって、語り手はむしろ伯夷・叔斉の高潔な生き方に対する諷刺を超えて、愛惜を強く示している、と考える。小説の中の伯夷・叔斉に対する、最後の部分を除くそれ以前の部分における、語り手のほ

のかな同情は、最後の場面で愛惜へと上昇する。

語り手（魯迅）は、「阿金」（1934・12・21、前掲）をつうじて、1934年頃の租界都市上海の、外国人が支配する階級社会において（大きくは、国民党が支配する中国という半封建半植民地の階級社会を視野に入れて）、外国人に雇われる下層階級の女性がいつも犠牲者・弱者であるとは限らない、むしろ彼女がその支配体制に無意識のうちに加担し迎合する場合があるという認識を、はじめて示した。

「私の文章の退歩を、阿金の騒ぎに罪をかぶせようとは思わない、しかも以上の議論も、大変腹いせに近い。しかし、近頃私が阿金を最も嫌うのは、あたかも彼女が私の一本の道を塞いだかのようにあって、そのことによるのは、確かである。

願わくば、阿金も中国女性の標本的存在でありえないことを。」（「阿金」）

そして「采薇」において語り手は、知的な召使い阿金姉さんを登場させ、彼女が武力で統一された周という支配体制に対して、加担し迎合する姿（阿金姉さんは付随的に、小丙君の場合は意図的に）を、阿金よりもいっそう鮮烈に批判的に示したものである、と考える。ただ、「采薇」の召使い阿金姉さんの女性像は、魯迅が阿金の衝撃を受けたのち、女性像追究のために行った様々の営為の一環であるという性格をもつと考える。

IV. さいごに

「阿金」（1934・12・21、前掲）の語り手（魯迅）の意図は、主として1930年代における租界都市上海の社会構造に対する告発であったと考える。また、1930年代の租界都市上海で外国人に雇われる下層社会における女性阿金の存在・行動に対する、魯迅の新しい認識と批判（国民性の問題に連結する批判、しかし第一動因としてではない批判）が語られた。新しい認識は語り手自身（魯迅）の観念論的理想主義に対する内省を促すものであった。

魯迅は1910年代末から1920年代において、子供・女性を中国旧社会における「被損害者」「被侮辱者」に属する弱者・被害者である、と基本的に考えた*²⁰。しかし魯迅は、「阿金」（1934・12・21、前掲）をとおして、1934年頃の租界都市上海で外国人に雇われ、無意識のうちにその支配体制に迎合し加担し、その中で自己の感覚的自由と享樂的自由を享受しようとする下層女性労働者の典型（男性の場合は西崽として現れる）が存在することに対する、新しい認識を語った。魯迅は1934年頃まで、自らの内に根強く存在した、旧社会における弱者としての、被害者としての女性像にのみとらわれていた。そのことが現実の女性像の一部（この時代と社会に迎合・加担し、ときには強者として現れる下層社会の

女性像)を見えなくさせていた可能性がある*²¹。1934年頃、租界都市上海の阿金は魯迅の女性像の盲点を厳しく突き、民衆像・知識人像の再検討、とりわけ中国の様々な地域の、現実の階級社会における具体的女性像の再検討・再確認を魯迅に迫ったと思われる。その意味から言えば、魯迅にとって阿金に対する新しい認識は大きな意味をもった。

その後の女性像に対する再検討・再認識の結果の一部が、「采薇」(1935・12、『故事新編』、文化生活出版社、1936・1)における召使い阿金姉さんであり、またケーテ・コルヴィッツにおける母親像と、戦う女性像(『凱綏・珂勒惠支版画選集』序目、1936・1・28、『且介亭雜文末編』)、そして「女吊」(1936・9・19-20、『且介亭雜文末編附集』)の女性像等ではなかっただろうか。

女性も男性と同じように、1930年代という時期において、中国旧社会という階級社会の中で(半封建半植民地という社会の中で)、様々な地域の中で、様々な役割を果たす姿をもって魯迅の視野の中に具体的に現れたと言える。

*1:『且介亭雜文』附記(1935・12・30、『且介亭雜文』)等によれば、「阿金」(1934・12・21執筆)は、『漫画生活』(吳朗西、黃士英等編、1934年9月創刊、上海美術生活雜誌社發行)に書かれたが、図書雜誌審査委員会の検閲(上海と南京中央の)によって掲載を許されず、のち『海燕』第2期(1936・2・20)に発表された。魯迅はこれを『且介亭雜文』(1935年末自ら編集、上海三閑書屋、1937・7、『魯迅全集』第6巻、1981)に編集するとき、検閲際の傍線をとどめた。

*2:『魯迅年譜(増訂本)』第3巻(魯迅博物館等編、人民文学出版社、2000・9〈北京第1版、1984・1〉)によれば、魯迅は1933年4月11日、施高塔路(いまの山陰路)大陸新村9号に引越した。ここは魯迅が上海に居住した時期における最後の住居となった。

*3:私が目をとおした小論の主題に関する論文等、参考とした文献等は次のものにとどまる。以下適宜に、小論の中で具体的に言及することにする。

[中国語文献]

①「談『阿金』像——魯迅作品研究外篇」(孟超、1941・9・18、『野草』第3巻第2期、1941・10・15、底本は、『魯迅研究學術論著資料匯編』第3巻〈中国文聯出版公司、1987・3〉)

②「読『阿金』」(鄭朝宗、1979・8・8、『福建文芸』1979年10期)

- ③「用歴史比照他們現實的醜態」(李希凡、1980・7・13、『《故事新編》研究資料』、孟広来等編、山東文芸出版社、1984・1)
- ④「『采薇』初探」(韓日新、『魯迅研究資料(9)』、天津人民出版社、1982・1)
- ⑤「魯迅“改造国民性”思想的評価問題」(竹潜民、1982・2、『魯迅晩年思想的当代解讀』、当代中国出版社、2001・7)
- ⑥「談『阿金』」(黃楣、『中国現代文学研究叢刊』1982年第3輯、1982・9)
- ⑦「魯迅前期思想中的個性主義、進化論及“国民性”問題」(魏競江、『魯迅研究文叢』第4輯、湖南人民出版社、1983・7)
- ⑧「從一部書看魯迅研究——讀『魯迅“国民性思想”討論集』」(竹潜民、1983・11、『魯迅晩年思想的当代解讀』、当代中国出版社、2001・7)
- ⑨『魯迅年譜(增訂本)』第3卷、第4卷(魯迅博物館等編、人民文学出版社、2000・9〈北京第1版、1984・1、9〉)
- ⑩「阿Q和阿金——病態人格の両面鏡子」(黃樂琴、『上海魯迅研究(4)』、1991・6)
- ⑪「病態社会的毒瘤——讀『阿金』」(趙燕濱、『魯迅名篇分類鑑賞辞典』、中国婦女出版社、1991・10)
- ⑫「關於魯迅的『阿金』」(倪墨炎、1992・1・19、『真假魯迅辨』、上海人民出版社、2010・9)
- ⑬「阿Q和阿金」(何滿子、『上海灘』1996年第2期)
- ⑭「『故事新編』漫談」(錢理群、2003年講演、『錢理群講学録』、広西師範大学出版社、2007・5)
- ⑮「魯迅和北京、上海的故事」(錢理群、2006・3・8定稿、『錢理群講学録』、広西師範大学出版社、2007・5)
- なお、日本では見ることでできなかった文献について、虞萍氏(名古屋大学〈非〉)、陳玲玲氏(上海交通大学)のお手を煩らわした。ここに記して感謝の意を表します。
- [日本語文献]
- ①「阿金考」(竹内実、『魯迅と現代』、勁草書房、1968・7・25)
- ②「中国の一九三〇年代と魯迅 時代に即して」(竹内実、『魯迅遠景』、田畑書店、1978・1・31)
- ③「出版と検閲——1930年代を主として——」(今村与志雄、『魯迅と一九三〇年代』、研文出版、1982・5・25)
- ④『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』(高橋孝助等編、東方書店、1995・5・20)

⑤『言語都市・上海 1840-1945』（和田博文等編、藤原書店、1999・9・30）

⑥「魯迅はどのように〈阿金〉を『見た』のか？」（李冬木、『吉田富夫先生退休記念中国学論集』、汲古書院、2008・3・1）

*4：短篇小説「桂花蒸 阿小悲秋」（張愛玲、1944・9、『張愛玲文集』第1巻）に外国人の女中を勤める阿小がいる。彼女は外国語をたぐることができた。

*5：「上海史年表」（『上海史——巨大都市の形成と人々の営み』、高橋孝助等編、東方書店、1995・5・20）、『魯迅年譜（増訂本）』第3巻、第4巻（魯迅博物館等編、人民文学出版社、2000・9（北京第1版、1984・1、9））による。

*6：「パブリックガーデン」（真鍋正宏、『言語都市・上海 1840-1945』、和田博文等編、藤原書店、1999・9・30）によれば、パブリックガーデン（現在の黄浦公園）には、「狗与華人不准入内」という看板があり、それが撤去されたのは1928年7月1日のことであった。それ以後、「一年間通用で僅かに一元」の記名パスが売られ、苦力の入場を阻んだ（『花甲録』、内山完造、岩波書店、1960・9・20、1939年の項目）という。

*7：「現今的新文学的概観」（『未名』第2巻第8期、1929・4・25、『三閑集』）で魯迅は次のように言う。

「上海の租界、その情況は、外国人が中央におり、その外側に、一群の通訳、密偵、巡査、西崽……の類がいて、外国語が分かり、租界の章程を熟知している。この圏外が、多くの庶民である。

庶民は租界に来ると、いつも本当の情況を理解できない。外国人が『Yes』と云えば、通訳は『彼がびんたを食らわせろ』と云っている。外国人が『No』と云えば、通訳されるのは彼が『銃殺しろ』と云っていることになる。」

*8：「談『阿金』像——魯迅作品研究外篇」（孟超、前掲、1941）は次のように言う。

「魯迅先生の筆のもとにおいて、もしも阿Qが中国特有の農民型を言うのであれば、それなら、阿金は半植民地中国の洋場における西崽像であると言わなければならない。」

「魯迅はどのように〈阿金〉を『見た』のか？」（李冬木、前掲、2008）は次のように指摘する。「私はここで〈阿金〉という人物の創作の基本がスミスの『従僕』、『ボーイ』より魯迅自身の『西崽』『西崽像』への発想の延長線上にあるとの観点を提起したい。」

*9：「俄文訳本『阿Q正伝』序」（1925・5・29、『集外集』）で魯迅は次のように言う。

「私はすでに試作はしたけれども、現代の我が国民の魂を本当に描きだすことができたかどうか、結局自分でもあまり自信がない。」

*10:「芸術について」(プレハーノフ、『芸術論』、外村史郎訳、叢文閣、1928・6・18、底本は第7刷(1929・10・3)、『芸術論』、魯迅訳、1929・10・12訳了、光華書局、1930・7)は次のように言う(旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改め、送り仮名はそのままとし、傍点を省略した)。

「スタール夫人の意見によれば、国民性は歴史的条件の所産であるということに注意することだ。しかし国民性は、若しもそれが与えられた国民の精神的特質の中に現れたものとしての人間の本性でないとしたら、何であるのか? (中略)

そして若しも所与の国民の本性がその歴史的発展によって創造されるならば、それがこの発展の第一動因であり得ないことは明らかである。がここからは文学——国民的精神的本性の反映——はこの本性がそれによって創造される歴史的条件そのものの所産であるということが出て来る。それは人間の本性ではなく、与えられた民族の性質ではなく、彼の歴史および彼の社会的構造が彼の文学を説明することを意味する。この観点からスタール夫人はフランスの文学を観察してもいるのである。彼女によって十七世紀のフランス文学に献げられた一章は、この文学の主たる性質を当時のフランスの社会・政治関係と、その帝王権に対する関係の中に観察されるフランスの貴族階級の心理とによって説明しようとした、極めて興味ある試みである。」(『芸術論』、外村史郎訳、61頁)

1928年以降マルクス主義を本格的に受容する中で、魯迅はプレハーノフの見解を学んだと思われる。それは、国民性が歴史的諸条件の所産であり、歴史的発展によって作りだされるものであるとする。国民性は、人間の本性ではなく、与えられた民族の性質ではなく、その歴史的諸条件と社会構造が生みだしたものである。

*11: 民衆の散沙のような状況について、魯迅は「沙」(1933・8・15、『南腔北調集』)で次のように言及する。

「近頃の読書人はいつも、中国人が散沙のようであって、考えるべき方法もないと慨嘆し、運の悪い責任をみんなに帰している。実際これは大部分の中国人に無実の罪を着せるものだ。」(「沙」、1933・8・15、前掲)

魯迅は、民衆が必ずしも散沙でないとする。民衆は自身の利害にかかわるとき、実際に行動して、請願し蜂起し謀反したとする。そして現在でも民衆の請願の類が存在する。

「それでは、中国には沙はないのだろうか。あることはある、しかし小民ではなく大小の支配者である。

人々はまたよく次のように言う、『昇官発財〔出世と金儲け——中井注〕』と。実はこの

二つは並列されるものではない。昇官しようとする理由は、ただ発財しようとするためであり、昇官は発財の道にすぎない。だから官僚は朝廷に依存しながらも、決して朝廷に忠ではない。吏役は役所に依存しながらも、決して役所を大切にしない。頭領が清廉の命令を出すと、手下は決して従うことがない。対処の方法には『蒙蔽 [欺くこと——中井注]』がある。彼らはすべて私利私欲の沙であり、己を肥やすことができるときには肥やす。しかもどの一粒も皇帝であり、帝を称することができるころでは帝を称する。或る人々はロシア皇帝を『沙皇 [ツァー——中井注]』と呼ぶが、これをこのやからに送れば、きわめてふさわしい尊号である。財はどこから来るのか。小民の身から削ぎおとすものである。小民が団結しうるなら、金儲けは面倒なことになる。それで、当然できるだけ方法を考えて、彼らを散沙に変化させなければならない。沙皇によって小民を治める、そこで全中国は『一皿の散沙』となった。」「[沙]、前掲)

散沙のような大小の沙皇(支配者層)によって、民衆が巧妙に分断して統治され、搾取されている。その結果、全中国(民衆を含めて)が散沙の状況を呈している、とする。中国の大小の支配者層による巧妙な分断統治を指摘する。

ここにおいて魯迅は、全中国の現状の散沙のような情況について民衆の国民性自体に原因を求めるのではなく、すなわち国民性を第一動因としてみるのではなく、歴史的諸条件と当時の社会状況を分析し、そこに発生の原因を求め、歴史的社会的所産としての中国の散沙の現状(国民性として表れる)を論じていると言える。ここにはマルクス主義(この場合の史的唯物論)を受容した魯迅の新しい姿勢がうかがわれる。

また、尤姆所宛て書簡(1936・3・4、『魯迅全集』第13巻、1981)においても、歴史的社会的諸条件の所産としての国民性に関する魯迅の考えを窺うことができる。

*12:「魯迅はどのように〈阿金〉を『見た』のか?」(李冬木、前掲、2008)は次のように指摘する。

「この作品〔『阿金』を指す——中井注〕には魯迅が常に抱いていた『国民性』に関する問題意識が強く浸透している。」

私は、「阿金」における阿金の形象に、国民性の問題意識が浸透してはいるが、しかしそれだけが「強く浸透し」たものとは考えない。「阿金」は、魯迅が国民性を第一動因として考えて、国民性を主たる問題意識として取りあげたものではないと思う。むしろ魯迅は、このような場所(租界都市上海)、このような時代(1934年頃)における、外国人に雇われた下層女性労働者を具体的形象的に描写しようとしている。その結果、阿金の形象は一つ

の典型を示している。阿金の形象は国民性の存在と連結するが、しかし魯迅の意図について言えば、国民性の問題意識は、社会的歴史的諸条件の所産であるという前提のもとにあったと思われ、ゆえに国民性自体の問題に「阿金」の最大の重点はなかったと考える。

典型について、『社会科学総合辞典』（新日本出版社、1992・7・15）は次のように指摘する。「個別的・感覚的な芸術形象が、芸術表現によって普遍性をもったものを典型という。芸術は感覚をはなれることができず、作品のなかにあらわれる人物や事象も具体的で生きいきと感覚的・個別的に表現されなければならない。このようなものが普遍的なものの集中的表現となるのが典型である。(中略) 類型は個性性をうしなつた普遍性であり、典型は個性性と普遍性の統一である。(中略) エンゲルスは人物の典型の問題を時代の『典型的な情況』との関連でとらえることを重視し、『典型的な情況のもとでの典型的性格の忠実な再現』を、リアリズム作家にもとめた。」

*13: 「写于深夜里」(『夜鶯』第1巻第3期、1936・5、『且介亭雜文末編』)で魯迅はケーテ・コルヴィッツの版画集について次のように言う。

「ここには貧困、疾病、飢餓、死亡がある……もちろん抵抗と闘争もあるが、しかし比較的少ない。これはちょうど作者の自画像のように、その顔には憎悪と憤怒があるけれども、いっそう多いのは慈愛と悲しみ哀れみであるのと同じである。これはあらゆる『辱められ損なわれた』母親の心の絵である。この類の母親は、爪をまだ赤く染めていない中国の田舎にも、つねに存在する。しかし人は彼女をあざ笑ひ、母親というものはただ役に立たない息子を愛すると言う。しかし彼女は役に立つ息子も愛している、ただ彼は強く能力もあるので、彼女は安心し、『辱められ損なわれた』子供に心を向けるのである。」

ここで魯迅は、母親（中国の田舎の母親を含めて）である女性の子供に対する愛を語っている。また「阿金」の最後の部分において、阿金が「中国女性の標本的存在でありえないことを」(「阿金」)、語り手（魯迅）は願っている。語り手（魯迅）が執筆の当初から、阿金を国民性の標本的存在を表すものとして描いたのではないことを、上の文は示していると考ええる。

*14: 伯夷・叔斉は命を賭して、周の武王に諫言した。そののち理想に殉じて餓死した。理想主義者・人道主義者アラジェフ(『工人綏惠略夫〔労働者シェヴィリョフ』)〈アルツィバーシェフ原作、魯迅訳、1920・10・22訳了〉の主要人物の一人)は、自らの死によって「愛」の存在を証明した。伯夷・叔斉は自らの死によって、「義」の存在を証明したと思われる。

*15: 物語の全体を通じて、叔斉は正義感の強い(たとえば周の武王の行動を、不孝不仁

と考え、軍隊の隊列の中に伯夷を引いて割りこみ、武王に諫言した)、人の気持ちが分かり(たとえば、昏倒した伯夷のために女性がもってきてくれた生姜のスープの残りを、無理にも飲んだ)、また慎重で思慮深い人(たとえば、首陽山で身分を明かさなかつた)として描かれている。また、叔齊は食い意地の張っていない、兄思いの人間(たとえば、首陽山で食物探しに努め、まっ先に兄伯夷に食べさせた)であることも、物語の中で十分窺われる。そのことから、召使い阿金姉さんの話は流言である、と読者が判断できるように、物語の筋が仕込まれている、と思われる。

叔齊の性格が友愛と暖かさに満ちていたことについて、「用歴史比照他們現實的醜態」(李希凡、1980・7・13、前掲)も指摘する。

*16: こうした自業自得説は次のような事件を連想させる。『『死地』』(1926・3・25、『華蓋集続編』、『魯迅全集』第3巻、1981)とその注によれば、1926年3月18日の北京での三・一八惨案後において、林学衡等は、徒手でデモを行う大衆に発砲し多数の死傷者を出した執政府の暴挙を非難せず、執政府の建物前を「死地」とし、あたかもデモの指導者に責任があるとして非難し、またデモをした青年・市民が自ら死を求めた自業自得の結果のように描きだした。この召使い阿金姉さんの自業自得説には、このときの林学衡等の姿勢と共通するものを見る。すなわち虚言によって、真の問題の所在を隠蔽した。

*17: 小丙君は、妲己の親戚として取りたてられたにもかかわらず、周の武王の強大な勢力を見て、これに加担し、保身をはかった。主義も信念もない小丙君は自らの行動に内省もない。伯夷・叔齊は自らの理想を貫こうとし、周の武王を不孝不仁と批判して、その粟を食らわず、その思いを彼らの詩に歌った。しかし小丙君は芸術のための芸術の立場からその詩を批判する。

*18: 1925年頃の女師大事件における楊蔭榆校長は、軍閥政府の権力と結託し、学生を抑圧した女性知識人である、と魯迅によってとらえられていたと思われる。魯迅は、楊蔭榆校長が北京女子師範大学の中で、あたかも封建的大家庭の中の封建的家長のようにふるまうものとしてとらえた。

「私は事実がどのようなものであるのかわからないが、小説から見ると、上海租界のやりて婆が良家の女性に逼るのには、きまった順序があった。凍え飢えさせ、つるし上げて折檻する。その結果、虐殺されたり或いは自死するほかは、ひとりとして命ごいをし命令に従わないものはいなかった。そこでやり手婆はやりたい放題に行い、暗黒の世界を築く。」(「女校長的男女的夢」、1925・8・6、『集外集拾遺』)

楊蔭榆校長が抑圧する側に立ち、流言を駆使した女性知識人であり、1925年当時、中国旧社会に加担する女性像の一つの典型として考えられたものであるとしても、むしろ魯迅はそれが少数であると考え、魯迅が当時注目したのは、それに対して闘う北京女師大学生であったと思われる。それゆえ1935年頃の阿金姉さんの姿は、1925年当時の背景をもちながら、魯迅が自らの新しい課題として、新たな女性像の典型の一つとして提示したものであると考える。

*19:「阿金考」(竹内実、前掲、1968)は、次のように論ずる。

「魯迅はこの『婦人』に、大嫌いな阿金のイメージをかさねた。莊重厳格な『義士』が、男を男と思わぬ『女中』の一言で卒倒する、この『義士』のみともない、死にかたに、莊重厳格な形式で保持されてきた徳目『義』の、現代におけるリアリティが示されている。この『義』を支えてきたのは、中国封建社会であり、それと骨がらみになった、封建イデオロギーの全体系である。阿金によって、これを一言のもとに葬り去った場面に、高らかにひびくのは、魯迅の哄笑である。」

「阿金考」(竹内実、前掲)はもとより「阿金」研究の先駆的で詳細緻密な論文である。しかし私には、魯迅がこのとき「義士」を封建的文化の代表として哄笑の対象としたとは思えない。

また、「『采薇』初探」(韓日新、前掲、1982・1)は、「采薇」が主に諷刺するのは隠士の看板をかかげる伯夷・叔斉であるとする。しかし私は「采薇」の主旨が伯夷・叔斉を諷刺・批判することのみにあるとは考えない。物語の後半部には観念論的理想主義に殉ずる「義士」に対する語り手の同情・愛惜を窺うことができる。

*20:それは、「我之節烈観」(1918・7・20、『新青年』第5巻第2号、1918・8・15、『墳』)、「我們現在怎樣做父親」(1919・10、『新青年』第6巻第6号、1919・11・1、『墳』)等に見られる。

*21:「離婚」(1925・11・6、『彷徨』)の女性愛姑は封建的農村の支配層に対して反抗・闘争し、失敗する。愛姑も中国旧社会の被害者の一人であると言える。